

# 旭川文学資料友の会 友の会通信

第3号

旭川文学資料友の会  
旭川常磐公園  
旭川市常磐館内  
tel 22-3310(228)

## 平成二十年度 「旭川文学資料友の会」総会を開催

平成二十年四月十二日(土)午後一時半から、旭川市民文化会館の二階第二会議室において平成二十年度定期総会が開催された。

開会に先立ち本年三月逝去された後藤軒太郎顧問(舷燈俳句会主宰)の霊に黙祷を捧げた。

相川会長の挨拶に引き続き、ご出席の大野・菅沼両顧問からご挨拶をいただく。(写真・下右と左)

会員の高齢化等による出席率の低下と併せてせっかくの高邁な運動に対する関心の希薄さを憂い一層奮励を望むコメント内容が印象的であった。



議長に石本裕之氏を選出し議事に入る。菅野事務局長からは平成十九年度の資料図書等が五十七名の方々から二千七百点、また、六名の方から協賛金二万八千円が寄せられこれと、コピー機と掃除機の寄贈があった旨紹介された。前期の事業活動においては、資料の分析整理カードが三千件を登録の進捗、延べ四百六十名の

ボランティア作業の稼働が報告があり、献身的なお手伝いに対してお礼と労いの言葉が述べられた。昨年の第十回旭川文学資料展「旭川ゆかりの作家・今野



大力」展に引き続き、今年度は九月六日から十月十三日まで、井上靖記念館を会場に「旭川ゆかりの文学者、宮之内一平の仕事―作家・歌人・編集者として」の展示会計画について決

議。課題である友の会会員の拡大勧誘と資料整理分析作業の継続について確認し合った。

平成十三年設立以来、願望とする文学資料館の設立構想について具体的な項目に沿って文書化にし市当局へ提出した。その内容を参考資料として配布されたので併載する。(八頁参照)



これまで資料のカード化データ入力の内訳は別表のとおり。また、整理済みの資料などはお気軽に閲覧活用をと呼びかけた。



### 資料調査室より

杏澤 章俊

週平均、十五名ほどで、友の会の資料整理ボランティア作業が行われています。内容は、整理カード記入、パソコン入力、グラシン紙がけなど。

グラシン紙とは、昔ながらの古本屋につきものの、薄くて白く透けて見える、あのカバーです。湿気や日光から本を守り長持ちさせます。問屋さんから50枚単位で安価で購入しました。貴重な資料を一つ一つ手作業で包んでゆくのですが、本がきれいになってゆくの、達成感があり以外とハマる作業です。

四月二日には中古のコピー機が東延江さんのツテで入りました。また、四月三十日には、閉鎖になった富貴堂本店から提供の本棚等二十台を資料調査室に運びました。



データ入力件数	1一般図書	2雑誌ほか	3その他	4写真資料	合計
A旭川関連資料	5,787	14,292	2,307	94	22,480
・小熊秀雄関係	143	264	69	16	492
・小熊秀雄賞	719	1,267	381	-	2,367
・今野大力	58	102	297	2	459
・安部公房	96	94	6	1	197
・板東三百	18	29	140	-	187
・井上 靖	244	44	4	3	295
・三浦綾子	843	122	75	2	1,042
・佐藤喜一	42	182	35	4	263
・高野斗志美	25	63	6	-	94
・木野 工	14	10	7	-	31
・鈴木政輝	26	36	-	2	64
・下村保太郎	50	52	137	4	243
・宮之内一平	59	392	25	1	477
・第七師団	74	9	-	-	83
・アイヌ資料	103	3	-	-	106
・その他旭川	3,273	11,623	1,125	59	16,080
B道内関連資料	3,634	1,922	213	118	5,887
C道外関連資料	9,425	1,183	367	-	10,975
A.B.C合計	18,846	17,397	2,879	212	39,342

昭和六年、鈴木政輝等が発刊した  
「萬國太陽旗」創刊号を入手

昭和七年創刊

の詩誌「不死鳥」の三十二号（昭九・五）に鈴木政輝は当時を回顧して次の一文を載せている。



二十七歳の記録  
——『萬國太陽旗』——に就て

鈴木 政輝

『萬國太陽旗』發刊當時を回顧して見て呉れ、と言ふ編輯者の言葉であるが、その時分は、左翼思想の武運華やかな昭和初年の、まことに、浮っ調子な日本であった六年である。私は東両國町の、隅田川の川端の、薄汚ないアパートの二階の一室に、上野図書館を背景にして獲得した知識と、國本社及び『祖國』の殿堂で把握した意志と、都會放浪及び旅行によって経験した情操の三つで、一杯になった身と心を、石のやうに冷たく、固たく、動かさずに抛げ轉るばしてゐた。無為無頓の姿であった。だが、獨立不羈のポオズであった。浪人そのものの精神を堅持した氣概があった。

その時『祖國』の編輯者藤井眞澄氏から来る九月號(?)に日本主義創作五篇を載せたいが。一つ書いて呉れと言ふことであつたが、別に新作の氣も進まないで、舊作『工場閉鎖』を送つた。さて、その原稿料で、何をしたのかさっぱり記憶が、今、私には無い。

だが、原稿生活に、一生を投じ去る興味が無かつた私は、その頃に、一つ小さなパンフレットでも出して、微力ながら國家の將來への、一寄盥をさせて貰ひたい、と言ふ具體的な念願の、湧いて來たのは。而して、その翌年の夏である。

※東延江著『旭川詩壇史』(一九九三・三・二〇) 49頁より転載

会の資料として、この「萬國太陽旗」創刊号が欲しかったところ、佐藤比左良氏がこれを入手し寄贈された。そのご苦労の経緯を綴っていただいた。



「萬國太陽旗」について

佐藤 比左良

昨年の第一〇回旭川文学資料展「今野大力とその時代」で、特別展示された「小熊秀雄詩集」は、死を目前にした大力に、友人の小熊がその病床に贈つたものでした。

扉の感動的な書き込み、それは、その時の二人の情景が鮮やかに見えるようで、本当に驚き、感激しました。

その後、その詩集は、インターネットで入手したものだど聞き、暇があると、古書オークションを彷徨い歩くようになりました。

まさか、再び、大力に関係するものが見付かることなど、柳の下に泥鰌がそうそう居るわけでもないのですが、ある日、珍しい獲物が釣針にかかりました。

「萬國太陽旗」です。しかし、これについては、東延江「旭川詩壇史」の知識しかなく、資料室にすでに収蔵されているものと思ひ釣り上げなかつたので、

オークション終了となつてしまいました。

幻の資料と解つたときは、後の祭、逃げた魚は大きい。そこで、IDの記憶を頼りに、丹念に探しまわりました。そして、出品者を尋ねあてましたが、当然、該当のモノはありません。

そこで、手頃な一冊を落札し、それを手がかりに、落札者が無かつた筈の「萬國」を譲り受ける交渉をすることにしました。詳しい方は、ご存じだと思いますが、こうするしか出品者との連絡方法はないのです。

こうして入手した「萬國」は、すでにパソコンの画面上では見ていたのに、紙面のほぼ半分を真赤に染めてある「日の丸」に改めて、驚かされました。

そして、それが「萬國太陽旗」であり、巻頭に鈴木政輝「天皇独裁世界国家」等とあれば、この機関誌の性格が自然にわかつてくるというものです。

しかし、今読むと、少々滑稽な氣もする超右翼の國粹主義者でありながら、さすがに詩人の主宰する機関誌。下村保太郎、小池栄寿は当然としても、萩原朔太郎、堀辰雄、山之口猥等、多くの有名詩人の作品が載せられ、まるで一流詩誌のようです。

そして、すべてが初出と思われ、例えば、山之口猥「ものもらひの詩」は、詩集「思弁の苑」等に収録されていますが、多少の異同が見受けられました。二行目「歩く度ごとに」は詩集では「歩くたびごとに」。

また、三連目も、萬國、詩集と並べてみると、推敲されているのがわかります。

或る日／港の空の／出帆旗をながめながら／ものもらひがふやうには／『怠惰よ』／後は、口ぐもつてしまひました。(萬國)

ある日／港の空の／出帆旗をながめ／  
 ためいきついてもものもらひが言ひました／  
 俺は怠惰者<sup>なまけもの</sup> と言ひました。(詩集)

たった十二ページの薄い資料「萬國太陽旗」ですが、じっくり向かいあえば、いろいろと面白い発見がありそうです。



「萬國太陽旗」発刊記念 昭和6年

写真(前列左より)吉本伸一・鈴木政輝・西倉保太郎・  
 油川鐘太郎・小住治三郎・下村保太郎、(後列左より)  
 中家ひとみ・竹吉新一郎・工藤昇・寺下正(稚内)・  
 小池栄壽

八十四年前、今野大力も通った旭川老舗の書店  
**三条八丁目、富貴堂本店が幕閉じる**



4月14日午後7時、シャッターを降ろす

大正三年創業、九十四年の歴史を誇った富貴堂本店が四月十四日をもって幕を降ろした。旭川で多くの読者に馴染みの書店が姿を消すニュースは寂しい限りである。その富貴堂本店で使われた書棚を旭川文学資料友の会が資料整理の保存用書棚として譲り受けることになった。

四月三十日(水)、友の会有志六名と運搬車の提供奉仕者によって積み出された。作業に参加した南さんから当日の様様を手記にしていた。

旭川文学資料友の会会員による  
**寄贈書棚の搬出・搬入作業について**

南 聡

例年より早い桜満開の四月三十日に旧富貴堂本店(旭川市三条通八丁目)から書棚を搬出し、あさひかわ文学資料調査室(常磐公園、旭川市常磐館内)に搬入する作業を旭川文学資料友の会会員(以下「会員」という。)によって行われました。その状況を以下のとおり記します。

当日、午前十時に会員六名及び書棚運搬用トラックの運転手一名が旧富貴堂本店(以下「旧本店」という。)前に集合し、早速のこと旧本店内に入り三、五階にあるスチール製書棚八台、木製書棚九台、ス

チール製書類収納棚三台をトラックに積み込むべく作業を開始しました。作業条件としては、書棚の丈が高くエレベーターを使用して運搬できるものが限られており、運搬においては主に階段を使用することになって、作業的には厳しいものとなりました。しかし、当初、作業手順等が手探り状態のところ、作業が進む内に作業手順及び役割分担も自然と確立し会員同士の連携もスムーズになって行きました。その結果、かなりの重労働だったにもかかわらず、午後四時には無事に文学資料調査室の近くの空き室に上記書棚等を全て搬入できました。作業終了時に文学資料調査室で飲んだお茶が格別な味でした。



この日、6人の会員がお手伝いに駆けつけトラックに積み込んだ。

第十一回旭川文学資料展「旭川ゆかりの文学者」

## 宮之内一平の仕事 作家・歌人・編集者

九月六日(土)から十月十三日(月)まで、井上靖記念館と共催による文学資料展の計画内容が明らかになった。平成十五年、九十歳で逝く宮之内一平氏の文学的業績をたどり、作家として、歌人、そして「豊談」の編集者としてその多彩な活動の足跡を偲ぶ。

### 【展示概要】

宮之内一平を紹介するための網羅的な展示。テーマ別に分けると、①作家として、②歌人として(並木凡平との関わり)、③郷土誌「豊談」の編集発行者として、④文士(中山義秀、本庄陸男、石川啄木)との関わり等。

【展示点数】約五〇〇点(生原稿、著書、写真、作品掲載誌など)

【催し物】朗読と歌九月二十一日(日)約一時間三十分

・宮之内一平作品の朗読と歌のひと時(解説つき)その素案として、小説集『造材飯場』(自伝的作品も所収)、随筆集『被写体』から一部。

口語短歌集『雑草園』から数首。「生活即短歌」「あなたの生活にリズムを」モットーに詠い、一首一首が連想風につながっていく作品なので面白く聴いていただけると思っています。

朗読出演者を募っており現在、森内、村田両氏の友情出演をいただいております。応募者大歓迎。

宮之内一平が愛した石川啄木の作詩から数編を歌唱して鑑賞いただきます。歌の出演は佐藤道子。

題材とする対象作品は、石川啄木の『一握の砂』より「初恋」(作曲・越谷達之助)、「東海の」(作曲・清瀬保二)、ほかを選曲中です。

## 私の「TOKYO物語」

煙山 一恵



昭和十七年八月、東京生まれ。旭川市在住。宮之内一平氏の長女。静岡県発行の文芸誌『木綿』同人。同誌に森夏生の筆名で、エッセイ等を執筆。市内の女声合唱グループ『四ツ葉会』会員。

今年五月十日、旭川クリスタルホールに於いて女声合唱団四ツ葉会による「ページジュコンサート」が開催された。所属五年の私にとっては三回目のコンサートだった。

プログラムの一つに“女声合唱のためのメドレー”「TOKYO物語」(カワイ出版)がある。リンゴの唄、東京の花売娘、星の流れに、東京ブギウギ、青い山脈、銀座カンカン娘、君の名は、お祭りマンボ、ここに幸ありの歌とナレーションによって戦争で焼き尽くされた東京が人々の力によって復興してゆく様子を表現している。

私はこれを習い始めた時、忘れていたものを出していた。「私の生まれ育った頃の東京のこと」を

私は昭和十七年八月十四日に東京の田端という所に生まれている。父は昭和十一年東京に出てきていて、そこへ昭和十六年に小樽から母が嫁いで行ったらしい。もうその頃は日本が長い戦争へと傾いていった不安な時代だったのではないだろうか。私が誕生したのも灯火管制の中の暗い病院だったと母から聞いた。貧しくても若い父と母と幼い私との生活は楽しかったに違いない。しかし、それも長くは続かなかった。敗戦さえ噂される昭和十九年の秋もはや

東京は危ないという事で、身重だった母と二才の私は父の故郷である永山町の親元へ疎開することになるのである。満員の列車と連絡船、又列車に乗り継ぎ、途中私が「お水が飲みたい。」とぐずったらしい。なだめる母に、海を見て「あそこにお水たくさんあるよ。」と尚もぐずる私をなだめるのが余程身に沁みたのか、ずっと後になっても母がよく話していた。父は徴用されて軍需工場へ行っていたので東京に残り、あの三月十日の東京大空襲に会うのである。永山の父の実家でそのニュースを聞いた時、母も親達も父は生きてはいないだろうと覚悟したという。しかし父は生き延びていた。住んでいた所も奇跡的に焼け残ったという。身体をこわし五月に永山へ帰って来て、そのまま終戦を迎えた。翌年昭和二十一年の十二月に再び焦土と化した東京へ行き、そのあまりに変貌した東京の姿をエッセイに残している。こうして、若い両親は、積み上げた総てを戦争によって失ったのである。

しかし、人間はたくましい。ゼロからの出発を何とかやりとげてしまう。私達もいつの間にか五人姉妹になり、父も気を入れて頑張らざるを得なかったのだろう。食べていく為の仕事しながらも、小説を書いたり、お酒を飲んだりして、しっかりと人生も楽しんでいたので、思い出される。

両親の介護を終えた時、合唱と出会った私は幸せ者だと思ふ。なぜなら、こうして合唱を通して父や母を想い、又子供の頃家族で歌った一場面を思い浮かべることができるのだから……



宮之内一平展をひかえて思うこと

沢栗 修二

第十一回の文学資料展は今年の九月、旭川井上靖記念館を会場に開催される計画でその準備作業に入った。タイトルは、旭川ゆかりの文学者「宮之内一平の仕事 ―作家・歌人・編集者として―」である。

この宮之内一平氏について忘れられないことがある。生前にお会いしたこと、亡くなられてのち氏が手がけられた座談会の三篇に接したことである。(旭川菓子商組合の座談会を司会し月刊豊談に三回にわたり掲載された)



在りし日の一平氏(2003年4月16日、90歳にて逝去)

昭和五十一年、大町のご自宅を訪問したことがある。当時、私は青年会議所の会員として部会の研究課題にとりあげられた『まちの民衆文化』をテーマに主に旭川市内における盆踊りの経緯とそれを支えた地域住民との関わりについて取材であった。その時の印象がいまだに忘れない。その頃の私は広告会社に勤めておりイベント事業担当だったことから、仕事のノウハウに関する該博にふれる思いで興味深く話をお伺い

た記憶である。

平成八年、三十八年間勤めた広告会社を定年退職した後、縁あって書店の旭川富貴堂に入り、流行の兆しにあったインターネットの立ち上げに参画。題材を井上靖、中原悌二郎、小熊秀雄に求めてコンテンツの制作に携わった。そのため、関連する文化講座に積極的に参加したり情報と素材の収集にあたった。平成十二年の秋、井上靖記念館が主催する『旭川文学散歩』に参加、講師である東延江さんから旭川文学資料研究会(現・旭川文学資料友の会)設立構想の話聞かされ入会したのがきっかけとなる。

平成十五年十月、二年後に創立百周年を迎えるという旭川菓子商組合の村本組合長(壺屋総本店会長)から記念誌の作成について相談を受けた。記念誌編纂について執筆者を探しているので推挙願いたいということであった。即座思い当たる心当たりもなく曖昧な相槌でその場は終わった。

当時、啓明小学校の教室を作業所としており山と積まれた収集資料の中から、宮之内一平氏が主宰された『豊談』に菓子商組合の座談会が載っていることを発見する。会の香澤さんの助力もあってこれが、三回にわたって掲載されていることが判った。その座談会と掲載された発行号のあまりにも隔たりがあることに訝しい思いがあった。

・座談会一、昭和三十一年十月十五日実施

(掲載は、昭和五十二年十月号)。

・座談会二、昭和四十八年三月十一日実施前半

(掲載は、昭和五十三年五月号)。

・座談会三、昭和四十八年三月十一日実施後半

(掲載は、昭和五十三年八月号)。

―三回目の掲載号(五十三年八月号)ではその経緯の詳細にふれている。※次の枠内記事

★本誌昨五十二年十月号および本年五月号において、旭川菓子商業界の昔を語る会の記録を収録した。是は実に二十一年前の昭和三十一年十月十五日の座談会であり、旭川菓子商業界の草分け先人たちの貴重を発言であり、今となってはすでに大方は物故者のそれであり、五月号においては戦後のヤミ菓子時代のものではあった。

★こうした先覚者たちの発言は、ひとり菓子商業界のみならず、いずれの業界にも共通する悩みであり、筆舌につくし難い苦労ではないだろうか。  
★そしてここに収録した座談会は、旭川菓子商業界の戦後の四方山話ではあるが、これもまたいずれの産業界にも共通する問題も含まれている。そしてこの座談会は四十八年三月の記録であり、四十八年秋の石油恐慌問題の産業界に与えた影響は深刻であり、笑う者泣く者いゆる悲喜交々であり、菓子業界は泣く者の立場側に立たされ、ために、菓子商組合の「創業七十年史」編さんの話も立消えとなつたのか、その後の音沙汰なく、この原稿もついに目の目を見ることなく、さればとてこのまま眠らせるのに忍び難く、本誌に収録し永く記録として残し、各方面他産業界の参考に供さんとするものである。 編集長 宮之内一平

私は、村本組合長にこの三篇の座談会を記念誌に再録を勧め、ご遺族の了解も得られたこと等から組合記念誌の編集に関わることになって、平成十七年五月挙行の一〇〇周年記念式典に合わせてこれを仕上げ発刊した。

振り返ってみるに、氏の志の幾分かを埋めることになるならば、と、さらに今回の旭川文学資料展のテーマとして宮之内一平の足跡を回顧する作業に関わることに意を満たす思いである。

そして私はその記念誌の関わりで壺屋に勤めることになった。考え合わせると、今あるはそれこそ宮之内一平氏をめぐる縁抜きには語れないと思っ

## 後藤先生のこと

坂井 京子

平成十三年四月二十二日「旭川文学資料研究会」(現旭川文学資料友の会)の設立総会が開かれた。その顧問の方々の中に、後藤軒太郎先生のお名前がある。その時以来、様々な形でこの会に対してご協力下さった後藤先生だったが、今年三月十一日にお亡くなりになった。満八十九歳であった。

先生は敬虔なクリスチャンとして日常生活を貫かれていらしたが、社会的には、旭川薬剤師会会長、教育委員長、旭川文化団体協議会副会長、三浦綾子記念文化財団副理事長などの要職を歴任された。

しかし私が親しくさせて頂いたのはそのいずれのお姿でもなく、俳人としての後藤先生であった。

先生は青年の頃から始めた俳句を生涯にわたって続けられていたが、一九八七年六月に俳誌「舷燈」を発刊され、昨年十二月に終刊するまでの二十年半の間、一度も遅れることなく発行し続けてこられた。私は平成五年四月から同人として参加させて頂いた



2002年、「舷燈」創刊15周年において

が、常に優しく温かく導いて下さった。

先生は青年時代に俳句を通して関わってきた方々や、療養時代に文学論を闘わせた方々と終生交流を深めて来られたようで、折々の記念大会などで、遠方から駆けつけて下さった方々のスピーチなどを聞いていると、男の友情の豊かさを感じて、これも先生のお人柄かと感銘を受けたものである。どの方々も文学青年のままの情熱に満ちていて、私は古き良き時代の文学の香りを大先達の方々から感じたのであった。

「舷燈」は先生の旧友を含め、巾広い文学関係者の執筆で彩られていて、俳句だけにとどまらず、随筆、評論、小説、詩などの分野で貴重な作品も載せられ、読む者を楽しませてくれた。



その「舷燈」が終刊になった折、今後のことについて話し合いが持たれたが、結局、「舷燈句会」と「おたまじゃくし句会」は今まで通り月一度の例会を持つて継続することになり、以来ずっと続いている。

そのことが、亡くなられた先生も望んでおられることかもしれない、とみんな心の中で思いつつ…。

私は今資料室で、偶然「舷燈」のカード記入を受け持っている。加藤次男夫人寄贈のもので、No. 一五号までの記入を終えたところである。「誌名「舷燈」」「創刊一九八七年六月」「発行者「後藤軒太郎」と一二五枚書いてきた。軒太郎先生の御名を一二五回も書き続けてきたので、私の心の中に、しっかりと先生が住みついたような気がしてならない。これも、資料室でお仕事をさせて頂いているご縁であろう。

## ◎事業活動をインターネットで紹介



旭川文化団体協議会の加盟サークルを広く紹介しようとインターネットでのページ紹介が始まった。これは

富貴堂文具館地階で営業する「あさひかわITコンシェルジュ」が各団体の年度総会に向けて広く参加を呼びかけたもの。友の会はこれに参加、このほど事業内容などが掲載された。

富貴堂ホームページからリンク <http://www.fukido.co.jp/>

## 文学館探訪

(文学館紀行訪問記などお寄せ下さい)

五月九日、姫路で開催中の全国菓子大博覧会の研修視察の道すがら小豆島の壺井栄文学館を訪れた。壺井栄と並ぶ繁治、黒島伝治の展示コーナーを許可を得て撮らせてもらう。常磐公園にある小熊秀雄詩碑の揮毫者として懐かしい筆の跡を見つめながら受付にいた女子職員に話しかけてみた。

小熊秀雄や今野大力が東京での生活で壺井栄と繁治と関ったこと、黒島伝治と大力との交流について話をしたが知らないと言ふ。繁治の揮毫した小熊秀雄詩碑の写真を送ることを約して辞したが、何とも拍子抜けする思いであった。昭和四二年五月二十七日の夜、旭川市公会堂で講演されたこと等を書き綴り、建立記念誌寄稿の書簡写真が載っている小熊秀雄賞『四十年の軌跡』も入



れ資料として送った。(沢)

# 収集の協力やお寄せいただいた 資料本の数々

昨年十月から今年五月末までに追加された資料の一部をご紹介します。

- ・小熊秀雄賞市民実行委員会会報(第一号)。
- ・富田正一詩集『天塩川』『流れ雲』『秋日』他。
- ・井上靖『西域物語』(朝日選書)。
- ・志賀英夫『戦前の詩誌・半世紀の年譜』(詩画工房)。
- ・創刊年、編集発行者、執筆者等記載。
- ・『本橋和治作品集』(自家版小冊子)。童話と川柳。
- ・大阪発行の詩誌『軸』。友の会会員の佐相憲一さん編集長。
- ・『旭川市民文芸』四九号ほか、『苫小牧市民文芸』さつぼろ市民文芸』『江別文学』等。
- ・佐々木千之『間宮林蔵』(国民社・昭十五)。
- ・小熊秀雄詩撰『星の光りのように』。旭川・小熊秀雄賞市民実行委員会発行。
- ・富田正一詩集『夕焼けの家』。
- ・澤田吐詩男『四国遍路俳句集』。自家版、美しい写真入り。
- ・旭川発行俳誌『広軌』『舷燈』『霧華』『泉』ほか、西東三鬼主宰『断崖』(創刊号より)等。
- ・『ロシア文学全集』全三十三巻(日本ブッククラブ)。
- ・三鬼宏『井上靖の詩の世界』(文芸社・平十九)。
- ・井上靖生誕百年記念。
- ・宮田汎『朔北の青春にかけた人びと』(自家版)。
- ・北海道初の治安維持法弾圧、集産党事件をめくつて。
- ・竹内利明『永遠の夏』(山と溪谷社)。旅行記。著者は旭川市居住。
- ・永江朗『(不良)のための文章術』(日本放送出版協会)、『批評の事情』(原書房)。著者は旭川市生

まれ。

- ・『萬國太陽旗』創刊号(昭六・東京)。鈴木政輝、下村保太郎、小池栄寿、西倉保、潟岡登ほか、萩原朔太郎、堀辰雄、山之口獺らも執筆。佐藤比左良さん、旭川発行雑誌『不死鳥』『疎林』とともにネットオークションにて落札。
- ・中山義秀『迷路』(共立書房・昭二十三)。短篇集。「迷路」の登場人物・宮地のモデルは宮之内一平。
- ・旭川発行職場サークル誌『オーロラ』『ささやき』『ぼぼろ』(昭二十二〜三十)他。
- ・遅塚麗水『山水供養』(春陽堂・大正二)。紀行文集。遅塚麗水(ちずかれいすい)は、アイヌ民族が登場する神居古潭が舞台の小説「蝦夷大王」を『都の花』に連載(明二十五・四月より)。このコピーも資料調査室にあります。
- ・米川正夫の小説「雪の底にて」(『新小説』大九・九月)コピー。
- ・潮音・新墾旭川支社、第六合同歌集『櫟(いちい)』。支社史考も掲載。
- ・郷土誌『豊談』合本。



昭和28年7月14号  
昭和29年1月20号  
昭和30年6月37号  
30年11月41号迄  
◎発行所旭川豊談クラブ  
(寄贈) 深谷雄大氏

発行人・三浦範男／編集人・岡島保二郎、山本英一他、横山、栗林

詩と版画雑誌『さとぼろ』(昭二・二月)。相川正義作品掲載。

・植村浩詩集『間島パルチザンの歌』。小熊秀雄についで詩掲載。

・中村文昭『宮沢賢治』『吉本隆明』『標的者とその影』『ポエジーと肉体の書』、中村文昭詩集『酵母する方向感覚』『北てんのうた』他。著者は旭川市生まれ。

・新井高子『タマシイ・ダンス』、竹田朔歩『サム・フランシスの慥慥(にんま)』。共に第四十一回小熊秀雄賞受賞詩集。ほかに、新井高子さん、竹田朔歩さんの直筆詩稿、詩集、詩誌。

・小熊秀雄第三詩集『心の城』(平十五・非売品限定十部)。小熊秀雄研究家の小峯久希さんが、文献研究を基に、小熊死後発行の第三詩集『流民詩集』の真意を汲み、編集しなおした自家版。

・さろん・ど・おんくり関係の新聞スクラップ帖。雑誌『プロレタリア』創刊号(昭五・十二月)。文芸戦線打倒同盟機関紙。今野大力、黒島伝治ら執筆。

・その他、旭川発行の各雑誌や、旭川関係者掲載の雑誌等。

~~~~~  
数多くの寄贈あり

がとうございまして。

閲覧、貸し出し希望の方はご一報を。是非ご利用ください。

お待ちしております。



(沓)

旭川文学資料友の会

(仮称) 旭川文学資料館構想について

平成十九年九月二十六日提出

1、目的(趣旨,意義,必要性)

趣旨: 将来の文学資料館設置に備えての文学資料の収集、整理、保存。

意義: 旭川の文化活動の資料を次世代にきちんと残すと共に、創作・文化活動の活性化に寄与する。

必要性: 高齢化が進み、現在資料を保持されている方々が逝去されると、貴重な資料が散逸してしまうおそれがあり、緊急の課題である。

2、機能,役割

旭川にゆかりのある文学資料全て(出版本・原稿・手紙・色紙・写真・新聞雑誌記事・年表等)、漫画・私家本から純文学まで収集・整理・保存し旭川市民に展示・閲覧・貸出しサービスを提供する。

3、展開する事業(具体的に)

①資料の収集・整理・搬入。②資料の展示・閲覧・複写・貸出し等のサービス提供。③定期的な企画展の開催。

④読書会・勉強会等の実施。⑤会報発行。

4、資料館の内容(展示,部屋割り等)

■展示コーナー(閲覧不可)

①小熊秀雄と今野大力、②小熊秀雄賞受賞の詩人たち、③板東三百、④旭川の詩、⑤旭川の短歌、⑥旭川の俳句、⑦旭川の創作、評論、川柳、⑧学校と文学(師範学校、旭中、旭商等)⑨児童文学漫画。

■自由閲覧

コーナー1・旭川関係の一般図書、雑誌等。コーナー2・辞書類、全国の雑誌。創作活動の参考に。生涯学習的なコーナー。

◎必要スペースの確保

①収蔵庫(閲覧室をかねる) 150㎡(現在109㎡)

②整理作業室60㎡(現在31㎡)

〈展示コーナー〉以下各15㎡合計120㎡必要、

③小熊秀雄と今野大力、④小熊秀雄賞の詩人たち、

⑤板東三百、⑥旭川の詩、⑦旭川の短歌、⑧旭川の俳句、⑨旭川の創作、評論、川柳、⑩学校と文学、

七師団と文学、⑪未整理資料等保管庫(現在無し)

新たに100㎡必要

以上最低でも必要スペースのは合計430㎡となる。

5、資料の収集(その範囲と方法)

〈範囲〉旭川関係①著者が旭川生まれ。②旭川居住経験あり。③舞台が旭川。④来旭作家。

北海道関係①著者が北海道生まれ。②道内居住経験あり。③舞台が北海道。

〈方法〉①現在保管されている方々に、友の会が直接寄贈を要請する。②新聞、広報などのメディアを活用。広く市民に資料の寄贈を呼びかける。

6、館の運営体制(官立民営〜室蘭方式を想定)

友の会ボランティア数十名。市(嘱託)職員若干名(館の規模によって違ってくる)。

7、図書館、博物館との役割の違い、連携する部分

〈連携部分〉図書館、博物館と連携を密にして、補完的役割機能も持つようにする。

〈図書館との役割の違い〉貴重な資料でも、できるだけ展示・閲覧・貸出しをする。

生涯学習の場として機能させる。(資料整理作業も生涯学習の場となっている)

8、井上靖記念館、三浦綾子文学記念館との役割の違い、連携する部分

三浦綾子、井上靖以外の旭川ゆかりの文学者全般を扱う。連携は随時密に。

9、旭川文学資料友の会の将来の展開方向

NPO資格を取得し、文学資料館を支える。

友の会人事動向

【新入会員】(かっこ内紹介者・敬称略) 能登谷繁(佐藤比左良)小田桐真志(沓澤)、

佐藤富子(大野信夫)

【退会者】堀田与一、片岡末司、鈴木陽子、古川昌子、白鳥八代子、大西晃

【逝去】一月十三日没・福中都生子様

三月十一日没・後藤軒太郎様

ご冥福をお祈り申し上げます。

福中 都生子 一九二八年(昭三)、東京生まれ。大阪市居住。詩誌「日本海」

「雑草原」「詩と真実」「地球」

を経る。その間「北の人」「ゲリラ」「ポエム」「大阪」「詩炎」

等を創刊。「陽」編集発行人。詩集『福中都生子全詩集』

『灰色の壁に』『雲の劇場』『南大阪』『淡海幻想』『わたしのみなもと』他。著書『医者の女房』『一億人の健康手帖』『詩にうたわれた恋文・十二章』他。アンソロジー『大阪詩集』編集人。

一九七八年第十一回小熊秀雄賞受賞



後藤 軒太郎 一九一九年(大八)、山形県生まれ。本名憲太郎。昭和十五年京都薬専卒業し旭川合同酒精に勤務、二八年退職し薬局を開業。俳句は二十年藤田旭山の手ほど

きで始め、塩野谷秋風の「霧華」、高橋貞俊の「水輪」で

精進、山口誓子、中村草田男に傾倒。

四八年現代俳句協会会員、四九年旬集「寒気団」を上梓、

五四年四条調剤薬局開設。平成十五年第十八回北海道新聞俳句賞受賞「潮騒」。旭川市教育委員会教育委員として

昭和四二年から五八年まで歴任、献血協議会会長就任。

昭和六二年俳誌「舷燈」創刊、平成十九年十二月号終刊。